

## 常盤塾 サマリー

【開催日 2008 年 10 月 18 日

【出席者（敬称略）】

常盤 片平 古川 松山 丸山 今田 砂田 平井 大下 松崎 伊藤 宇野 白井 久保 古城 松永

<文責> 今田 2008/11/9

【トルコにて思ったこと】

常盤文克

①不思議な欧亜交差点 ②グローバルとは何か ③金融危機はなぜ起きているのか

人口 7000 万人、面積は日本の約 2 倍、一人当たり GDP は世界 58 位の USD13,000。歴史的にはイスラムとキリスト教の交差点、また地政学的には黒海からの出口ボスポラス海峡と要するトルコ。日本と非常に異なる環境に身を置き、そこから日本を見ることで、ものの見方や考え方に多様性が欠かせないことを改めて痛感した。

グローバル化とは何かと考えてみると、こういった文化文明の多様性があるがままに認めることではないかと思う。人はもともと多様であり、一つの色に染めたりまとめあげたりできる存在ではありえない。人が生み出す多様性こそが社会や経済の活力の源であり、大切にしていきたいと思う。

「収斂の法則」を提唱するグレン・フクシマに対し、サミュエル・ハンチントンは多様性を唱えている。たぶん後者が重視されるべきであろう。清濁を併せ呑む文明の交差点・トルコはその一つのモデルかもしれない。

今日、世界規模で発生している金融危機の理由に、世界が狭くなったとの主張を聞くことがあるが、決して一様にフラット化しているのではあるまい。確かにカネには色はなく、情報化社会では記号として世界を瞬時に飛び交う。流通の道具という本質からして当然だ。しかし人間社会はどうだろう。文化や価値観といったものは逆に、より多様化し、モザイクのような状況を呈しているのではないか。

世界を混乱に陥れている原因には、自国で善とされることは世界中に善と思ひ込むアメリカの思い上がりがある。パスポートさえ持たない上院議員がいると聞く、このように偏狭な視野で世界を物語ることは傲慢そのものである。イスラム社会が独特だとしたら、それはそのまま受け入れるべきだ。社会で活動している主体は人である。社会について考察するには、まずそこで活動している人を入り口に考えなければならない。カネは一つのアウトプット、すなわち出口にしかすぎない。

人はローカルをベースに生きている。グローバルを語るには、まずローカルを、その独自性を、認めることから始めねばならない。真のグローバル化とは決してアメリカ化を意味するものではない。実体経済の何倍にも膨れ上がった金融システムに依存した社会が健

全とは到底言えない。

そもそも企業とは何のために存在するのか。株価のためだろうか、売上のためだろうか。そして相場の乱高下に為すすべもなく翻弄されるべきものだろうか。会社の価値とはそれほどに不安定なものだろうか。

J.P. モルガンの元社長が金融経済のことを「自由という言葉の濫用によるマネーでの支配」と表現したのを聞いたことがある。目先の分かり易い記号、「カネ」を直接に振り回し、帳簿上での動きに流されるアメリカ流の金融システムは、結局のところ底力が弱いのではないか。警鐘を鳴らしつづけているクルーグマンにノーベル賞が与えられることは象徴的と思える。企業のあるべき姿や幸せな社会を形づくっていくには、こういった思いを以下に大きな声にしていくかが肝要である。遺憾ながら大合唱を作り上げることに非常に長けているのはアメリカなのではあるが。

日本を離れて日本を見ると様々なことに気付かされる。例えばトルコ人は日本に対して大変好意的で、よく知っている。しかし我々日本人はトルコに対してどうだろうか。ものづくりの世界では品質の3Tとしてタイ、台湾、トルコと並び称するが、一般的にはどうだろうか。自らの立ち位置を外の視点、特に小さな国からの視点で見ると、はっと気付かされることが多い。

我々の見学も、工場を見せていただくだけでなく、相手の視点から我々がどう見えているのか、意識していきたい。翻って我が身を見る謙虚さを忘れてはならない。相手がいて自分がある複数の視点をもってこそ、本当に「高級な会社」「志ある会社」にめぐり合うことができるだろう。

<コメント> 松永

自社内でもよく”Local First”ということを行っている。まず自分たちの考えや方法で自立しないことには、良い成果は生み出せない。フラット化はよくない。違うからこそ価値が生まれる

<コメント> 片平

ものづくりの基本を「愛せるものをつくる」ことにあるのだろう。便利なモノが手を伸ばせばいくらでも手に入る現代の若者は、かえって不幸ではないか。Onlyの価値を実感する機会をなくしているように思われる。

<以下、雑駁に討議>

- ・企業にとって儲けは結果であり、目標ではない
- ・新たな指標を作ろう
- ・物事は対（ペア）で成立する
- ・簡単に手に入る「便利」と、苦勞して自分の力で作り出す「喜び」
- ・売る質、売りつづける品質とはどのようなものだろうか

【見学候補企業】

日本理化学工業（砂田薫）

ニュー・メディカ・テック（平井道夫）

岡田製糖所（平井道夫）

よーじ屋（久保晶子）

ゲンゼ（常盤文克）

以上

<編集後記> 漢字に感じる今日この頃

今田純

最近、漢字って本当によくできた表意文字だなあと思う事が多い。たとえば企業と会社ってどう違うんだろう、と漢字を眺めると、

企業=企み+わざ

会社=会+やしろ

神がいる社が神社。坂本竜馬が仲間と集った、海援隊の母体が亀山社中。「人が会うところ」が会社なんだろうか。かたや「企みごとにより生業を成り立たせる」のが企業かな。なんだか会社が企業になると、つまらなくなる気がする。磯野マスオさんはどうしたって会社員であって、企業人ではなさそうだ。

会社を成り立たせるものは信用に他ならない。この信を分解すると「人（にんべん）+言葉」となる。心で思っているだけじゃだめ、ちゃんと相手に伝えなきゃ。さらに信じる+者（人間）で「儲かる」。人が言葉を発し、信用が生まれ、信じる人が儲かる。たしかに儲けは信じる人同士の出会いの結果であるのか。

“Change”をキーワードにバラク・オバマは当選した。日本語では「変革」、要するに変わること。この漢字が「へん」とも読まれることをまた、面白く思う。英語の Strange と Change はお互いに共有する意味を内在しないのに。

『へん』と『かわる』はおんなじ字。変でなければ変わらない、お粗末様でした。